

## 江戸時代における白話小説の読まれ方

— 鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵「金瓶梅」を中心として —

川島優子

はじめに

江戸時代、多くの白話小説が中国からもたらされた。『水滸伝』の日本での流行は周知のところであるが、従来あまり取り上げられることのなかった『金瓶梅』も、十七世紀中頃には伝来していたと考えられる。<sup>(1)</sup>『金瓶梅』はその後もたびたび舶載書目に名前が確認され、寛延四年（一七五二）には十一部も輸入されている。<sup>(2)</sup>十八世紀中頃になると、石崎又造氏によって「斯くて是等俗文学者達によつて俗語小説は次第に解読せられ、普及せられて行つた。そこで『水滸伝』の語釈物も既述の外多数無名氏の手になつてゐる。……前後未曾有といふ可く以て小説流行の一斑を窺うに足るであらう。此外俗語小説向の字書や一般俗字書は枚挙に遑ない」と指摘されるように、白話小説ブームが到来する。この時期には、岡白駒の『水滸全伝訳解』（一七二七年昆齋写）、陶山南涛『忠義水滸伝解』（一七五七年刊）、鳥山輔昌『忠義水滸伝抄

訳』（一七八四年刊）といった『水滸伝』関係の語釈集や、一鯤北溟の『小説抱璞集』（一七四七年刊）、秋水園主人『小説字彙』（一七九一年刊）など白話辞書ともいふべき書物が多く編まれている。江戸や京阪では白話小説をはじめとする中国俗文学の講読会も盛んに行われていたようである。

では彼らはいったい白話小説をどのように読んだのだろうか。現在我々が目にしうるもの——上述した辞書類や刊行された翻訳書など——は、そのほとんどがいわば「完成形」とも言うべきものであつて、そこに至るまでの過程、つまり具体的な解読の様子、方法を知りうる資料はそう多くはない。

そうした江戸時代（とりわけ後期）における白話小説の「読まれ方」を窺わせる資料がある。鹿児島大学付属図書館玉里文庫所蔵の「金瓶梅」と題される抄本がそれである（以下、「玉里本」と略称する）。『金瓶梅』（張竹坡批評本）<sup>(3)</sup>全文が抄写され、そこに訓点、和訳、注が施

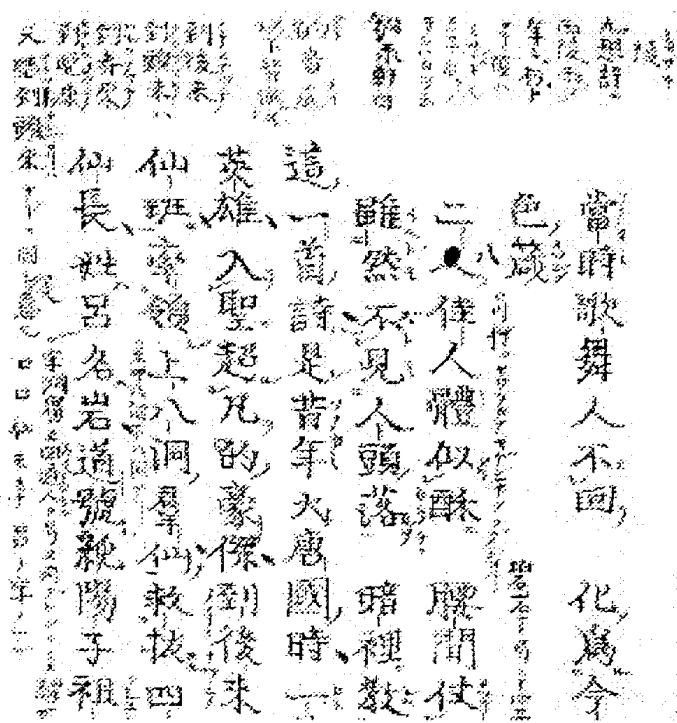
されたもので、文政十年（一八二七）から天保三年（一八三二）にかけて作成されたものである。現在のところ、これが江戸時代のものとしては唯一の、そして現存する最古の『金瓶梅』の邦訳ということになる。余白に記される様々な注、作成者の落書きとも思える書き入れなどからは、この玉里本が決してそのまゝ世に出されることを意図して作られたもの、つまり「完成形」にあたるものではなく、『金瓶梅』を読んだ際のノート、言ってみれば未整理の状態のものだということがわかる。さらにこの玉里本は、（後述するが）『金瓶梅』講読会の記録という側面も持っている。未整理の講義ノートであるがゆえに、注の付けられ方、解釈の揺れ、興味の対象など、玉里本からは、作成者およびその周囲の人々が『金瓶梅』をどのように読んでいったのが浮かび上がってくるのである。

玉里本について最初にまとまった報告を行ったのは徳田武「遠山荷塘と『金瓶梅』」（『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店一九八七）であり、その後、井上泰山「高階正異訳『金瓶梅』覚書」（『中国俗文学研究』11、一九九三）『中国近世戯曲小説論集』関西大学出版部二〇〇四）でも玉里本についての紹介がなされている。前者は『金瓶梅』読書会の中心人物と目される遠山荷塘に関する考察に主眼が置かれたもので、後者は「覚書」とあるように、玉里本全体に関する紹介と初歩的考察が行われたものである。両者とも玉里本の書き込みの一部を任意

に取り上げ、読書会の様子に言及してはいるものの、『金瓶梅』がどう読まれたか、という視点での具体的、系統的考察が行われたものではない。

そこで本稿では、江戸時代後期における『金瓶梅』の読まれ方、ひいては白話小説の読まれ方がどのようなであったのかを明らかにすべく、玉里本に考察を加えたい。

一 玉里本について



第一回一葉ウラ（上半部）

まず最初に、玉里本について確認しておきたい。玉里本の全体像に関しては、すでに徳田武氏によって詳細な報告が行われている。そこで、ここではそれを参照しながら整理することとする。

〈1〉『金瓶梅』（張竹坡批評本）全百回の本文（部分的に張竹坡の批評が引かれる）が書き写され、そこに句読、訓点が施される。ところどころ左右に和訳が付けられ、上欄および余白には様々な書き込みが見られる。徳田氏によると「すべて一筆」とのこと。筆者もひとまず同意する。

〈2〉筆写を行ったのは高階正異<sup>たかしなまさつね</sup>。字は子止、号は鉛秉軒、俗号は原田（頗羅墮）端太夫。江戸の麻布長坂に生まれ、玉里本作成当時は青山の穩田に住んでいたとらしい。文政十年の時点で二十二歳。

〈3〉回末の日付から、玉里本の作成時期は、文政十年（一八二七）から天保三年（一八三二）にかけてのことだとわかる。おおよそ回の早いものから作られているようだが、必ずしも厳密ではなく、日付がある回の中で最も早いものが第五十回（文政十年九月）、最も遅いものが第九十五回（天保三年四月）である。

〈4〉「圭上人曰、还ハワタスコトナリ。还<sup>ワタシ</sup>我<sup>ニ</sup>主<sup>ヲ</sup>児<sup>ト</sup>来<sup>シ</sup>」（第五回）といった書き入れが見られることから、玉里本には『金瓶梅』読書会が開かれた折の、「圭上人」すなわち遠山荷塘の語釈や見解が記されているようである。

また、「這<sup>コ</sup>回<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>十九<sup>フ</sup>回<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>荷<sup>カ</sup>塘<sup>タ</sup>圭<sup>ウ</sup>上<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>句<sup>ク</sup>讀<sup>ク</sup>ナリ、<sup>ナカレ</sup>別<sup>ナ</sup>等<sup>ナ</sup>閑<sup>ナ</sup>看<sup>ル</sup>ル<sup>コト</sup>罷<sup>ヨ</sup>」（第二十九回）や「コレハ鉛<sup>ニ</sup>秉<sup>ノ</sup>訳<sup>ナリ</sup>。本文ノトホリハ一圭の点ナリ（第三十五回）」といった書き入れがあることから、徳田氏は、全体の施訓も荷塘のものである可能性が高いとされる。

〈5〉「荷塘一圭門人鉛秉陳人高階正異<sup>タカシナマサツネ</sup>訳（第二十六回）」「荷塘圭上人門<sup>デ</sup>葉<sup>シ</sup>鉛秉陳人正異<sup>マサツネ</sup>訳（第三十三回）」といった記述から、高階正異が遠山荷塘の弟子であつたらしきことがわかる。徳田氏は、玉里本は師である遠山荷塘の訓法に基づいて、弟子の正異が施訓を行ったものとの見解を示される。

〈6〉白話小説を解読する際にも、和漢の硬軟雅俗にわたる文献に用例を求め、それに基づいて語釈するという学問的な方法が取られていたことが窺える。

以上、玉里本は、遠山荷塘という人物を中心とした読書会の様子を、弟子の高階正異が記録したものと、ということになる。遠山荷塘の関与について、中でも玉里本にたびたび引かれる『記諺』という語釈集らしきものが、遠山荷塘の著作とされる白話辞書『胡言漢語』の前身であろうとの指摘をされたことは、徳田氏の大きな功績といえよう。

ここで遠山荷塘について確認しておきたい。<sup>(5)</sup>遠山荷塘（号は一圭、一溪、荷塘道人）、陸奥の人。十七歳で出家し、二十二歳の頃から諸国を遊歴、二十三歳のころ豊後

日田の広瀬淡窓の塾に入る。その後二十七歳から三十歳までの約三年、長崎に留学。留学後、筑前の亀井昭陽宅に三ヶ月あまり滞在した後、一旦淡窓の元に寄り、約半年諸国を遊歴しつつ江戸に至る。江戸に着いた翌年には朝川善庵、大窪天民、宮澤雲山らに招かれ、『西廂記』『琵琶記』の講義を行う。また、大窪詩佛の家で、朝川善庵、菊池五山、館柳湾、大沼竹溪、清水礫洲らを前に『水滸伝』の講義も行っている。天保二年七月一日、三十七歳で病没。『諺解校注古本西廂記』『胡言漢語』『訳解笑林広記』『月琴考』などを著したとされる。

玉里本には、その他、『嬉遊笑覧』『筠庭雜考』の著者としても知られる国学者・喜多村筠庭のコメントも散見される。少なくとも、遠山荷塘、喜多村筠庭、高階正巽が席を同じくして『金瓶梅』を読んでいたことは間違いないだろう。

ただし、玉里本全体が読書会の記録だとは考えがたい。玉里本各回の回末には、ほぼ全回にわたって高階正巽の署名が見られるが、その中で日付が入れられているものが、全百回中、四十七回分、これら四十七回分だけを日付の順に並び替えてみると、書かれた時期によって、大まかではあるが、署名にある一定の傾向が見られることがわかる。また筆跡や体裁も、書かれた時期によって異なる特徴を示しているように思われる。こうした様々な要素を総合的に考えた上で、日付のない回を暫定的に組み込んでみると【表1】のようになる。これらの中で、

遠山荷塘の発言が記されている回、もしくは遠山荷塘への言及が見られる回を確認してみると、それが文政十一（十二年頃）に書かれたと思われる回に集中していることがわかる。<sup>6)</sup> そもそも遠山荷塘は、文政八年（一八二五）に江戸に上り、天保二年（一八三一）七月一日には没している。そうしたことを考えあわせても、遠山荷塘の関与は文政十一（十二年頃）に限られるようである。また、同席していたと思しき喜多村筠庭の発言もやはり同時期のものであると思われ、限定される。そう考えると、遠山荷塘の関与のみならず、読書会の開催自体が文政十一（十二年頃）のことだと推測できよう。このことは、第六十二回（文政十二年八月十一日）と第六十三回（天保二年六月四日）の間に約二年のブランクがあることも関係しているように思われる。

つまり玉里本は、「文政十一年（十二年頃）に書かれたと思われる回」と、「それ以降に書かれたと思われる回」とに分けて考える必要があるだろう。読書会の記録という側面を持つのは、前者ということになる。<sup>7)</sup>

そこで以下、「文政十一年（十二年頃）に書かれたと思われる回」を中心に分析を加え、遠山荷塘、高階正巽および読書会メンバーがどのように『金瓶梅』を読んでいたのか、具体的に考えてみたい。

## 二 『金瓶梅』はどう読まれたか

玉里本には、上欄、余白に様々な書き込みが見られる。

書き込みを行ったのは高階正巽と思われるが、それが果たして誰の見解であるのか、必ずしもすべてが特定できるわけではない。また、本文の施訓に關しても、誰によるものかはにわかには定めがたい。しかし「文政十一年」十二年頃に書かれたと思われる回」に關しては、直接的であれ、間接的であれ、「讀書会での『金瓶梅』の読まれ方」を反映しているものと見ることができよう。そこでここでは、発言や施訓の主体については特にこだわることなく、讀書会全体での『金瓶梅』の読まれ方を示したものとして処理したい。

以下、「文政十一年」十二年頃に書かれたと思われる回」のものを中心として、「(一) 発音」「(二) 語釈」「(三) 解釈」に分けて、分析を進めたい。

### (一) 発音

玉里本には、たびたび中国語の発音が示される。

#### 第一回 二十四葉オモテ

可不折殺小人罷了。

#### 第一回 三十二葉ウラ

搬音般、唐音パンナリ。搬運。

#### 第二回 六葉ウラ

匹手與劈手通 劈手搶

#### 第七十九回 二十葉ウラ

ヒツタクル

擦 ツケル、ヌル。華音ツア、漢音サ。

このようなカタカナによる中国語音の表示は、江戸時代に作られた他の白話辞書などにもよく見られるもので、決してめずらしいことではない。このことは、白話小説の流行が、唐話(当時の現代中国語)の学習と密接な關係にあつたことを窺わせるものである。

そもそも白話小説は唐話のテキストとして用いられていた。江戸時代には、文人たちの間で唐話の学習が広く行われていたが、その発端ともなったのが、荻生徂徠(一六六六—一七二八)による「唐話學習のススメ」だと考えられる。

……予嘗為蒙生定學問之法。先為崎陽之學、教以俗語、誦以華音、<sup>一</sup> 訳以<sup>二</sup> 此方俚語。絶不作<sup>レ</sup>和訓廻環之讀。

……予嘗て蒙生のために學問の法を定む。先づ崎陽の學「筆者注：長崎の學問、つまり唐話を學ぶこと」を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てし、絶して和訓廻環の讀を作さず。

(『訳文筌蹄』訳筌初編題言十則)

古典を正しく理解するには、訓讀ではなく、中国語音に

て直読すべきである、と主張する徂徠は、自らの学塾に、長崎唐通事出身で後に江戸時代を代表する唐話研究者となる岡島冠山（一六七四〜一七二八）を講師として招き、自身も冠山の指導のもと唐話を学んだ。こうした日本人学習者のために、冠山は多くの唐話のテキストを編纂する。『水滸伝』の和刻本としては我が国初となる『忠義水滸伝』（初集五冊は享保三年刊）の訓点者も冠山だとされるが、これもそうした唐話テキスト編纂の一環としてとらえることが可能ではないだろうか。

唐話学習における白話小説の有用性は、たびたび指摘されるところでもある。たとえば、長崎で中国語を学び、のち対馬藩にて朝鮮通事として活躍した雨森芳州（一六六八〜一七五五）は、

或曰、学唐話<sup>ヲ</sup>須読小説<sup>ヲ</sup>可<sup>ナラン</sup>乎。曰可也<sup>ナリ</sup>。

或ひと曰く、唐話を学ぶに小説を読むを須<sup>もち</sup>ふるは可<sup>なり</sup>らんかと。曰く、可なり。（『橘窓茶話』卷之上<sup>(10)</sup>）

と指摘、また江戸中期の文人画家で、長崎に遊学して中国語を学んだ柳沢淇園（一七〇四〜一七五八）も、

象胥「筆者注：通訳のこと」学びたく思ふならば、水滸伝・西遊記・通俗三国志などを唐よみに学ぶべし。（柳沢淇園『ひとりね』上<sup>(11)</sup>）

と、白話小説が唐話学習に有効であることを指摘している。

『水滸伝』に関しては講読会も広く行われていたようだが、その席上では音読もされていたと思しい。たとえば『水滸伝』の辞書のひとつとして現在も残る『忠義水滸伝解』（宝暦七年刊 『唐話辞書類集』第二集所収）は、陶山南涛（一七〇〇〜一七六六）による『水滸伝』の講義を弟子が記録、整理したものとされるが、ここでは列挙されるすべての語にカタカナで発音が表記されている。こうしたことから、白話小説は、唐話の学習（とりわけ発音）と密接な関係にあったことが指摘できよう。

『金瓶梅』の読書会でも、長崎留学で中国語をマスターした遠山荷塘先生によって、音読、あるいは発音の指導が行われていたようだ。

#### 第五回 六葉オモチ

圭上人曰 直<sup>ジ</sup>ハ<sup>ハ</sup>翁<sup>ト</sup>唐音ニテ通ス ヲシコムコト也

#### 第十三回 四葉ウラ

甚<sup>シ</sup>モ 甚<sup>ハ</sup>去声ニテ華音シヤ也 ジンモナドトヨムベカラス

また高階正巽自身も、ある程度は中国語音に通じていたと思しい。

## 第一回 十葉オモテ

鉛<sup>ス</sup>承<sup>シ</sup>按<sup>ス</sup>スルニ自<sup>ツク</sup>恁<sup>ニ</sup>ハ似<sup>ツク</sup>恁<sup>ニ</sup>ノ音<sup>ヲ</sup>通<sup>ス</sup>ナルベシ。金丹ノ詩ニ  
 似<sup>カク</sup>恁<sup>ク</sup>游<sup>ノ</sup>沮<sup>ム</sup>枉<sup>ム</sup>用<sup>ユ</sup>心<sup>ヲ</sup>トアリ。又也似<sup>エ</sup>ヲ也<sup>エ</sup>是<sup>ス</sup>ト  
 モ通<sup>カ</sup>シ、自<sup>ラ</sup>是<sup>レ</sup>ノ処<sup>ヘ</sup>モ用<sup>ヒ</sup>タリ。

## 第三回 五葉オモテ

鉛<sup>ス</sup>承<sup>シ</sup>再<sup>シ</sup>按<sup>ス</sup> 終<sup>チヨ</sup>不<sup>ボ</sup>成<sup>セ</sup> 終<sup>チヨ</sup>不<sup>ボ</sup>然<sup>ゼ</sup> 同<sup>トウ</sup>義<sup>ギ</sup>カ。

## 第四十九回 十四葉ウラ

鉛<sup>ス</sup>承<sup>シ</sup>按<sup>ス</sup>スルニ不<sup>ボ</sup>消<sup>セ</sup>ハ不<sup>ボ</sup>須<sup>ス</sup>ナリ。蓋<sup>ス</sup>シ消<sup>セ</sup>ハ須<sup>ス</sup>ノ  
 音<sup>ヲ</sup>ノ轉<sup>テ</sup>ジタルカ。

白話小説の場合、音通する別の文字が用いられる場合もあるため、中国語音の理解は、本文を解釈する際にも必要だったようだ。

ただしこれら中国語の発音表記は、読書会が開かれていた時期のものに集中しており、読書会が開かれなかった後に書かれたと考えられる回のものには、ほとんど見られなくなる。音読は、読書会では行われていたものの、その後、おそらく高階正異が一人で読み進めたであろう際には行われなかったようである（少なくとも中国語音がわざわざ注記されることはなくなつた）。こうしたことから、読書会の席上で、『金瓶梅』が唐話のテキストとしての側面を有していたことが指摘できよう。

以上、玉里本に見られる発音表記からは、『金瓶梅』の一部が何らかの形で音読されていたこと、そしてそれは江戸時代後期においても、白話小説が唐話のテキストとしてなお有効であったことを窺わせるものであることがわかつた。

## (二) 語釈

続いて語釈に関する書き入れを確認していきたい。

## 第一回 二葉オモテ

利害ハ害ト云コトナリ。又緩急ハ只急ト云コト。是非ハ非ト云コト也。

## 第一回 二十九葉ウラ

好ハ好生也。偏生ヲ偏ト云カコトシ。生ハツケジ也。

## 第七十二回 十葉ウラ

央及、及ハ助語。

これらの書き入れは、たんに単語の意味を記すのではなく、その語の文法的特徴を示すものである。こうした方法は、先行する辞書類とも共通する。

『忠義水滸伝解』（宝暦七年刊 『唐話辞書類集』第三集所収）

利害 キツイコトナリ 雅語ニテハ利ト害トニツ事ニ

ナルナリ 俗語ニテハ害バカリノコトナリ 前二釈シ  
タル 大小浅深等ノ類ナリ 男ト云コトヲ男女ト云モ  
同シ

『忠義水滸伝鈔記』（天明頃の成立か 『唐話辞書類集』

第三集所収）

偏生 ヒトエニイヂワルクト云コトナリ 生ハ付字也

これらは、中国においては長らく研究の対象とはされな  
かった白話小説が、日本においては文言の作品同様、一  
字一句の意味を明らかにする研究的態度で読まれたこと  
を示している。同時に、作品を読むことで、白話の読解  
力そのものを養おうとする意識も窺える。そうした意味  
では、単に作品を楽しむというのではなく、やはりテキ  
ストとしての側面を色濃く備えるものだったと言えよう。  
それは、次の書き込みに見られる遠山荷塘の指導からも  
窺える。

### 第十六回 N葉オモテ

這些 …… 圭上人云、些ハ漢土ノ言語ノ助字ナレバ  
シイテ解スベカラズ。多ク書ヲヨミテ知ベシ。

さて、語釈に関して注目すべきは、様々な文献から用  
例が引かれている点である。

第三回 三葉オモテ（本文中の「双六」に対して）  
五雜組六ノ二十二 雙陸、一名ハ握槊、本ト胡ノ戲也。

第十二回 U葉オモテ（本文中の「稀罕」に対して）

肉蒲団 希罕<sup>ス</sup> 我這等醜陋東西<sup>ヲ</sup>。

ヨミカギリ

こうした、様々な文献から用例が挙げられる点に関し  
ては、すでに徳田氏による指摘がある。氏の考察による  
と、玉里本にたびたび引かれる『記諺』という書は、遠  
山荷塘が白話読解のために作成していた語釈ノートであ  
ろうとのこと、それは長澤規矩也氏によって「邦人編者  
の俗語解の類書中では、比すべきもない出色の書」と評  
された『胡言漢語』の前身にあたるものだということが、  
そしてそのノートに基づいて用例が示されたであろうと  
のことである。玉里本にはおびただしい数の書物が引用  
されているが、その書目に関しては、井上氏によって整  
理されているので、ここでは挙げない。

ここで特に指摘しておきたいのは、語釈にあたって、  
彼らが和漢の古典作品に用例を求めただけでなく、同時  
代の先行研究をも大いに参考に行っている点である。

たとえば第六回の末尾には、「馬蹄刀木杓裏切菜<sup>ニ</sup> 西  
門慶ト金蓮ト通奸ノコトヲ隠スコトハナラヌト云論也：  
…「水泄不<sup>レ</sup>漏<sup>ル</sup> 半点儿<sup>ヲ</sup> 也没<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup> 落<sup>ル</sup> 地<sup>ニ</sup> タトヒ  
世間ニテ通奸<sup>レ</sup>ノウワサガアルトモ我ハ少シモ漏サヌト云



論ナリ」といった、本文中のフレーズに関する釈義が付  
けられた後、「右水滸伝解後篇」との書き込みが見られる。  
その釈義は「水滸伝解」なるものに拠ったというのだ。

『金瓶梅』は周知の通り『水滸伝』から誕生したもので、  
『金瓶梅』第一回と第十回および第七十九回は、部分的  
に『水滸伝』第二十三回と第二十七回と重なっている。

当時すでに進んでいた『水滸伝』に関する先行研究を、  
彼らは参考にしていたようなのだ。

当時成立していた『水滸伝』に関する代表的な辞書と  
しては、以下の四種が挙げられる。<sup>13)</sup>

㉞ 『水滸全伝訳解』(第一回と第二百十回)

岡白駒講、昆齋校正 享保頃成立

㉟ 『忠義水滸伝解』(第一回と第十六回)

陶山南涛 宝暦七年(1757)刊

㊱ 『忠義水滸伝抄訳』(第十七回と第二百十回)

天明頃の成立か

㊲ 『忠義水滸伝抄訳』(第十七回と第三十六回)

鳥山輔昌天明四年(1784)刊

彼らが参照したという「水滸伝解」は、どれに当たるの  
だろうか。玉里本第六回末尾の釈義をこれら四種の該当  
箇所と対照させてみると、㉞と完全に一致することがわ  
かった。㉟との一致はこの箇所にとどまらない。本文中  
の和訳においても、明らかに㉟の訳語を採用したと思わ  
れる箇所が複数確認される。いくつかその例を挙げてみ  
よう。玉里本の本文での和訳、そしてそれが上述四種の

辞書ではどう和訳されているかを挙げる(その語が取ら  
れていない場合は挙げない)。

玉里本(第二回十一葉オモテ)

錯見 ヲミカギリ

㉞ 錯見 ヲミヘナサレヌゾ 錯ハクヒチガフ也

㉟ 錯見 見アヤマル トリチカヘル

㊱ 錯見了 ヲミカギリト云コトナリ

玉里本(第三回十三葉ウラ)

布機也似針線 布ヲオルコトクニ針ヲツカフテキキ

ト云コト也

㉞ 布機也似 機ニテ織タル様ニ縫

㉟ 布機也似好針線 機ニテ布ヲ織ル如クニヨク縫ナリ

㊱ 布機也似好針線 布ヲオル如クニ針ヲツカウテキキ

ト云コトナリ

玉里本(第五回三葉ウラ)

出得他手 カレニカツコトハナルマイ

㉞ 出得他手 カレガ手ヨリ上ナコトハアルマイ

㉟ 出得他手 彼ニ勝ツコトハアルマイト云フコト也

玉里本(第五回六葉ウラ)

死力頂住 ココヲサイゴトヲサヘル

- ㊦ 死力頂住 ゼヒトモ動サヌヤウニトメテ居ル
- ㊧ 死力頂住 ココヲサイゴトオサエル也

こうして見比べてみると、その一致が偶然ではなく、明らかに㊦の訳語をそのまま採用したことによるものだということがわかる。しかし、彼らは決して安易に㊦に拠ったわけではないようだ。先行する辞書に訳語があっても、それを採用せず、あえて自分たちでより良いと判断される新たな訳語を当てている箇所も複数みられる。

玉里本（第五回八葉オモテ）

- ㊨ 氣得發昏 ム子ンガリテ メガクラム
- ㊩ 氣得發昏 アマリハラヲ立テ目ヲマワスコト
- ㊪ 氣得發昏 アマリ立腹シテ目ヲマワスコト也

玉里本（第五回九葉オモテ）

- 情孚意合 マコトアリテ心カ相合ト云
- ㊫ 情孚意合 情意ノアマネクネンゴロナルコト
- ㊬ 情孚意合 情意ノ深クネンゴロナルコトナリ

一旦自分たちで訳語を付けた後、試行錯誤の末、最終的に㊬の訳語を採用したと思しき箇所もある。

玉里本（第五回七葉オモテ）

キヲツケ

提醒  
キヲツケ

- ㊭ 提醒 ハヂシメラレテイカサマニモト思フテ氣ヲ引立ルコト
- ㊮ 提醒 氣ヲツケラレルコト

こうした例からは、先行研究を参考にしつつもそれに寄りかかるとはなく、よりよい解釈、訳語を求めて試行錯誤する彼らの姿が浮かび上がってくる。そうしたこだわりは、随所に見られる。

第十五回 二葉オモテ（本文中の「轎子」<sup>ノリモノ</sup>に対して）

- 轎子<sup>ノリモノ</sup> カゴトハ訳サレズ ヒトリデヲス車ノゴトキノナリ。

第十五回 十六葉オモテ（本文中の「保兒」<sup>ワカイモノ</sup>に対して）

- 保兒ハデツチ。シモヲトコナド訳スルヨリ、院裡<sup>ジヨウロヤ</sup>ナレバ ワカイモノト訳スルガ的當スルナラン。

第五十六回 十葉オモテ（本文中の「栲栳」<sup>ザル</sup>に対して）

- 栲栳ハ竹籃<sup>タケカゴ</sup>児ナリ タケタゴトモ ザルトモ訳スザルノホウガヨカルベシ。

安易に訳語を当ててのではなく、その文脈においてほど

う訳すのが最も適當であるのか、検討を重ねたようである。

さて、先行研究を参考にするという点に関しては、他にも例が見られる。

### 第一回 十二葉ウラ

瞧ハミルコトナリ。ソレヲ岡白駒ナドハ スイリヨウト

ヤクスコト ハ〇ウスヤ〇ウボハ〇ウスヤ〇ウ 好 笑 不好 笑

岡白駒（一六九二〜一七六七）といえは、江戸時代前期を代表する白話小説研究家で、長崎に遊学して唐話を学び、「三言」を日本に紹介した人物としても知られる。『水滸全伝訳解』（上述の㉞）は、岡白駒による『水滸伝』の講義を「昆齋」という人物が記録、整理して成ったとされるが、その第二十一回部分に「瞧見 スイリヤウ」とある。高階正異ら読書会メンバーは、おそらくここを参照したのであろう。その上で、「瞧」は「見ること」であつて「推量」ではおかしい、と批判しているのである。先ほど、彼らが先行する『水滸伝』の辞書を参考にしていたことは述べた。その際、彼らが㉞に多く拠っていることを指摘したが、彼らは決して㉞しか見ていなかったわけではない。少なくとも㉞は参照した上で、㉞の訳語を多く採用した、ということになる。

### 第三十二回 九葉オモテ

虎口ハ大ユビトヒトサシノアイダヲ云ト南山考講記ニ  
ミユ。一説ニ虎口ハ馬オオ口也、非也。  
ホボノクチ

### 第五十八回 十六葉ウラ

南山俗語考ニ貝ノ総名ヲ蛤螺ト云。

ここでは、『南山考講記』『南山俗語考』が参照されている。薩摩藩第八代藩主であった島津重豪（一七四五〜一八三三）による俗語集で、『南山考講記』は『南山俗語考』の前身とされる。『南山考講記』第四卷「身体」に「虎口ヲヲユヒヒトサシノアイ」、『南山俗語考』巻五「鱗介部」に「蛤螺 貝ノ摠名」とある。

### 第五十七回 五葉オモテ（本文中の「做主」に対して）

唐話使用ニ作主ハフンベツト訳シ セワフセン ヤクツウルイリ  
ヤクニハ カタウトト訳ス 出頭ハリツシント訳ス。

### 第十回 C葉ウラ（本文中の「闘毆」に対して）

雅俗語類ニ闘毆ヲタタカヒウツト訳スルアリ。  
タタカヒウツ

ここに挙げられる『唐話使用』（享保二十年）、『訳通類略』（正徳享保頃か）、『唐音雅俗語類』（享保十一年刊）は、いずれも岡島冠山の著作、もしくは岡島冠山の講義

を基に作成されたものである。それぞれ、『唐話使用』巻四に「……凡事全靠仁兄作主。……凡事全ク仁兄ノ御分別ヲタノミ候フ。……」、「訳通類略」『仕官類』に「出頭了 立身スル」とある（「作主」は未見）。また、『唐音雅俗語類』巻五に「鬪毆及故殺人者不知何斷 鬪毆及故二人ヲ殺ス者ハ如何決断スヤ」とある。

第十六回 三葉オモテ

這些<sup>コソアマタ</sup> 孔雀先生ノ訳也。些<sup>アマタ</sup>ノ字ヲ多<sup>アマタ</sup>ノ義トナルナド トキ妙ナコトヲ云テ 人ヲ狐惑セントハウマイウマイ。ソレハ昔流行<sup>ハヤ</sup>ラヌ時ノコト、今ノ人ハソノテハクワヌゾ。

第四十六回 総辞三葉オモテ（本文六葉ウラの「食面」<sup>クヒモノ</sup>）

に対しての釈義

孔雀先生 食ヲ見サル面ノ像ダト訳セリ。大ニ非ナリ。

孔雀先生とは江戸中期の儒者・清田儋叟（一七二一〜一七八五）のこと（号は孔雀楼）と思われる。中国小説を好み、『水滸伝』を愛読していたとされる彼の訳語も、こうしてたびたび批判の対象となつてゐる（なお、ここで挙げられる「這些」「食面」に関しては未見）。

このように、彼らは先行研究を参考にしつつも、それを全面的に採用するのではなく、批判を加えながらよりよい解釈を試みていたことがわかる。

以上、語釈のなされ方に考察を加えた結果、『金瓶梅』が唐話、白話の理解力を養わんとして（いわばテキストとして）読まれていたこと、また古典に用例が求められ、極めて学問的態度で読まれたことが確認できた。

(三) 解釈

さて、こうして発音を確認し、一字一句意味を確認した後、彼らほどのように『金瓶梅』を解釈していったのだろうか。そこには、語釈の際にも見られた、彼らのこだわり、そして試行錯誤の痕跡が見られる。

第十六回 F葉ウラ

【本文】除<sup>レ</sup>了我家舖<sup>カ</sup>子大発貨多<sup>マ</sup>、随問多<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>時<sup>ト</sup>、不<sup>レ</sup>怕<sup>レ</sup>他<sup>ノ</sup>

不<sup>レ</sup>来<sup>テ</sup>尋<sup>テ</sup>我<sup>ヲ</sup>。

【上欄】不<sup>レ</sup>怕<sup>レ</sup>クニセヌ不<sup>レ</sup>他<sup>ノ</sup>来<sup>テ</sup>尋<sup>テ</sup>我<sup>ヲ</sup>。

本文で「彼の来て我を尋ねざるを怕れず」と読んだものを、上欄にて「彼の来て我を尋ねざるをくにせぬ」と訂正している。

第一回 三十三葉オモテ

【本文】見<sup>テ</sup>他<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>分<sup>ナ</sup>常<sup>ニ</sup>照<sup>ル</sup>顧<sup>ル</sup>他<sup>ノ</sup>、照<sup>ル</sup>顧<sup>ル</sup>他<sup>ノ</sup>依<sup>テ</sup>舊<sup>ニ</sup>賣<sup>リ</sup>些<sup>ノ</sup>

炊<sup>リ</sup>餅<sup>ヲ</sup>、……。

【上欄】常照顧他、照顧他 旧ニヨツテ些ノ炊餅

ヲウラシメ トヨムベシ

再按スルニ 常照顧他 照顧ス トヨムヲ穩也トス

本文では「常に他を照顧、照顧他れモトノゴトク些ノ炊餅ヲ賣り…」と読んでいるが、上欄にて「常に他を照顧す、他れを照顧して旧ニヨツテ些ノ炊餅ヲウラシメ」と訂正、その後さらに、「再按するに、常に他を照顧照顧す」と、句点の位置まで変更して読むよう訂正している。

第八十七回 六葉オモテ

【本文】那漢子殺人不斬眼、…鉛汞按スルニ殺人

不眨眼ハ人ヲコロスニ目ニモ見セズニコロスト云コト也。此ニ眨トアルベキヲ斬トアルハ書損ナルベシ。眨音札、コノコトワザハ水滸ニモミヘタリ。

【上欄】鉛汞再按、不斬眼ハ不眨眼ノ書損デハナシ。

本文で「那の漢子、人を殺すに眼に斬ず（めにもみせぬ）」と読んだ後、割注で「斬」字が「眨」字の誤りではないかとの見解を示すも、上欄にて前言を撤回、「不斬眼は不眨眼の書損ではなし」と訂正を加えている。

以上のように、玉里本には一旦訓点を施した後に訂正

（あるいは再訂正）が加えられるケースもたびたび見られる。こうした、よりよいものへの追求の姿勢は、玉里本最大の特徴のひとつだとも言えよう。それは特に玉里本作者である高階正巽に顕著だったように思われる。

第七十九回 二十六葉オモテ

【本文】大街上胡太医最治的好痰火、…

【上欄】治的好痰火、初回会一手好琵琶又

会一腿好氣毬トアリ。カカレバ痰火ヲ治

シ的好シトハヨマレマイ。然レドモ看的好痰火

好トアレバ治的好痰火トヨンデモキコヘル。

姑舎待圭上人解。

「治的好痰火」〔筆者注…痰火は喘息のこと〕と付けられ

た本文の読みに対し、「治的好痰火」と読めるので

はないかとの見解を示した高階正巽は、その根拠として、

「会一手好琵琶」「会一腿好氣毬」と、「好

十名詞」の形で読まれている他の例を挙げる。しかし一

方で、「看的好痰火」と、「好」を補語的に解釈する例

を挙げ、やはり元の読みも可能であることを確認。最後に、「ひとまず置いておいて、圭上人の意見を聞いてみよ

う」と書き入れている。若き高階青年が、頭を抱えながら真剣に『金瓶梅』を読む姿が眼前に浮かんでくるようである。

こうした解釈の揺れ、試行錯誤の跡からは、白話小説、なかでも特に難解とされる『金瓶梅』が、彼らにとつて決して簡単に読めるものではなかったこと、しかしだからこそ読み応えもあつたであろうことが窺える。付け加えておくと、残念ながら彼らが最終的に『金瓶梅』を完全に読めたとは考えがたい。特に、洒落言葉やスラングに関しては、手つかずの箇所が多数見られる。

#### おわりに

江戸時代に流行した白話小説は、いったいどのようなように読まれたのだろうか。本稿では、そうした江戸時代における白話小説の読まれ方の一端を探るべく、江戸時代後期に作られた『金瓶梅』の訓訳本「玉里本」について、考察を試みた。その結果をまとめると以下のようなになる。

①『金瓶梅』の読書会ではその一部が何らかの形で音読されていたと考えられる。これは、白話小説が唐話のテキストとして用いられていた江戸初期の白話小説の受容のあり方を窺わせるものであり、『金瓶梅』も唐話のテキストとして用いられていたことを示している。

②必要であれば文法的解説を加えたり、様々な文献から用例を挙げたりしながら、一字一句の意味にこだわり、よりよい訳語、解釈を追求する姿勢が見られる。

③先行研究を大いに利用し、時には批判をも加えている。これらは、当時数多く作られた白話に関する書物（特に写本としてのみ残るもの）が、どのように流通し、読まれていたのかを示す資料にもなり得る。

④解釈に、揺れ、試行錯誤の跡が見られる。白話小説、とりわけ『金瓶梅』の読解が彼らにとつてたいへん難しいものであつたことが窺える。

また、今回特に取り上げることにはしなかったものの、「俣ハ尽ノ俗字ナルベシ（第八回M葉オモテ）」「鉛承山人云、豊ハ豊ノ俗字、体ハ體ノ俗字。唐本即チカクノゴトクニアリ（第九回D葉ウラ）」など、字体に関する注記が見られたり、「後來、一本作後日（第三十八回八葉ウラ）」「一點、袖珍本作点（第四十九回前半 九葉オモテ）」など、校勘が行われていたと思われる記述が見られたり、建物の構造や楽器などの図が示されたりするなど、『金瓶梅』がきわめて研究的態度で読まれていたことを窺わせる例が他にも見られることを付け加えておきたい。

玉里本に見られた読解の方法が、すべて当時の白話小説の読まれ方に当てはまるとは言い切れない。しかし少なくとも玉里本から浮かび上がる『金瓶梅』の読まれ方は、当時の白話小説の読まれ方のひとつのあり方を提示してくれているといえよう。

そして何より、今回の考察結果を受け、従来の『金瓶梅』受容に関する見方に訂正を加える必要があるように思う。澤田瑞穂氏は、かつて日本における『金瓶梅』の

受容のあり方について、以下のように指摘された。

日本では江戸末期に大衆作家の馬琴が自作に翻案して『新編金瓶梅』を出したのが、公然と『金瓶梅』を宣伝した唯一の例といつてよく、『水滸伝』や『西遊記』ほど大衆に親しまれ、日本文学に影響を与えていることはなかった。何しろ「淫書」の随一というキワメがついているので、君子の読んだり語ったりするものではないと考えられ、せいぜい唐話（当時の中国語・中国俗語文）をこなす一部の漢学者が、こつそり机の下から取り出して読むくらいであった。

この「机の下の読物」という日蔭の身分が、江戸時代から明治・大正と続き、次の昭和も、戦前は公然とこれを研究の対象にすることはできなかつた。淫書という呪縛が、思想の抑圧とともに容易に解けなかつたからである。（『金瓶梅』の研究と資料）『中国の八大小説』平凡社一九六五）

澤田氏に限らず、『金瓶梅』の受容に関して、こうした見方が一般化しているようである。確かに『金瓶梅』に性描写が含まれることは、その研究を遅らせる最大の要因だったと言えよう。しかしそれは明治以降のことであつて、江戸時代の『金瓶梅』は、もつとオープンに、もつと真剣に読まれたと考えられるのだ。<sup>14)</sup>

さて、今回は玉里本の中でも、読書会の記録という側面を持つ部分を中心に考察を行ったが、読書会が開かれなくなつた後も、高階正異によって『金瓶梅』は読み続

けられ、第百回まで施訓が行われる。そもそも高階正異とは何者なのか、玉里本はなぜ作られたのか、高階正異にとつて『金瓶梅』とはどういう意味を持つ作品だったのか、なぜ鹿児島大学に所蔵されているのか等々、玉里本からは、いまだほとんど明らかに成っていない江戸時代における『金瓶梅』の受容の在り方を窺うことができ。このことに関しては、稿を改めて論じたい。

#### 注

(1) 日光山輪王寺慈眼堂所蔵の『金瓶梅詞話』には「天海蔵」との印があり、天海僧正（一五三六～一六四三）の存命中に日本に伝来したものと考えられる。また、同版と思われる徳山毛利家所蔵の『金瓶梅詞話』も、宝永五年（一七〇八）に作られた『御書物目録』にはすでにその名が見られる。こうしたことから、十七世紀中頃にはすでに伝来していたと考えられよう。

(2) 大場脩『舶載書目』（関西大学東西学術研究書資料七一 九七二）

(3) 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（清水弘文堂書房一九六七）

(4) 『金瓶梅』には大きく三つの版本がある。

① 万曆四十五年（一六一七）の序を持つ版本「金瓶梅詞話」（通称「詞話本」「万曆本」等）

② 崇禎年間（一六二八～一六四四）までに改訂された版本「新刻繡像批評金瓶梅」（通称「改訂本」「崇禎本」）

等)

③②に清代の文人張竹坡が評を付けた版本「第一奇書金瓶梅」(通称「第一奇書本」「張竹坡批評本」等)

一般的な流通ルートに乗ったのは③であり、今回取り上げる玉里本も、この③(「張竹坡批評本」)全百回を抄写し、そこに訓点及び注を施したものである。

(5) 遠山荷塘に関しては、石崎又造『近代日本に於ける支那俗語文学史』(清水弘文堂書房一九六七)、青木正児「伝奇小説を講じ月琴を善したる遠山荷塘が伝の箋」(『青木正児全集』第二卷 春秋堂一九七〇)、山口剛「荷塘印影」(『山口剛著作集』第六卷 中央公論社一九七二)、岩城秀夫「僧一圭と亀井昭陽」(『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』朋友書店一九七九)、徳田武「遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽」(『江戸漢学の世界』ペリかん社一九九〇)等がある。これらを参照した。

(6) この点に関しては、井上泰山「高階正異訳『金瓶梅』覚書」(『中国俗文学研究』11、一九九三)、『中国近世戯曲小説論集』関西大学出版部二〇〇四)においても、「荷塘が『金瓶梅』の会読に加わっていた時期を特定することは困難であるが、筆者の推測によれば、それは意外に短い期間ではなかったかと思われる。かく推定する理由は、本書において荷塘の号である「圭」又は「一圭」の名が記された全十七箇所のうち、抄写年代を特定できるものが四箇所(十三回・二十五回・二十九回・三十六回)あり、そのいずれもが文政十一年に偏っていることによる。」と指摘される。

(7) 後半は注や書き込みが極端に減少する。また量的違いのみならず、質的な違いも見いだせる。

(8) 『荻生徂徠全集』第五卷(河出書房新社一九七七)所収のものに拠る。

(9) 『唐話類纂』『唐話纂要』『唐話便覧』『唐話雅俗語類』(いずれも『唐話辞書類集』汲古書院一九六九所収)などがある。

(10) 『日本随筆大成』第二期第七卷(吉川弘文館一九七四)所収のものに拠る。

(11) 日本古典文学大系96『近世随想集』(岩波書店一九六五)所収のものに拠る。

(12) 『唐話辞書類集』第一卷(汲古書院一九六九)解説部分。

(13) いずれも『唐話辞書類集』(汲古書院一九六九)所収。

(14) この点に関しては、「江戸時代の『金瓶梅』」(『アジア遊学』一〇五 特集：日本庶民文芸と中国』二〇〇七)でも指摘した。

\*本稿は平成二十一年度文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)の交付を受けた研究成果の一部である。また、鹿児島大学付属図書館には、玉里本全文複写の便宜を与えていただいた。ここに感謝の意を表したい。



## 【表1】

★：遠山荷塘との関係が窺える回

☆：喜多村筠庭の発言が見られる回

回	年号	西暦	署名
49 (後半)	文政十丁亥年九月(二十二歳)	1827/9	鉛永樓(金瀝生)主人 寫之
50	文政十丁亥年九月(二十二歳)	1827/9	鉛永樓主人(金瀝生)寫於木犀花陰
1	文政十一年戊子稔正月二十九天	1828/1/29	鉛永樓金瀝高階正巽子正
2	文政十一年戊子稔正月二十九天	1828/1/29	鉛瀨樓(金瀝)主人寫之
3			鉛瀨樓(金瀝)主人寫之
4			鉛瀨樓(金瀝)主人寫之
5 ★			鉛永樓(金瀝生)主人寫了薔薇架下
6			鉛永樓主人寫
10			鉛永樓主人寫
11	時文政十一土兄鼠二月後六	1828/2/26	鉛永樓主人寫之
12	文政十一年戊子三月初二天	1828/3/2	鉛瀨樓主人 正巽寫之
13 ★	文政十一、土兄鼠	1828	鉛永樓主人、娶了無情的不丟底女、害房罷、 禁毬毬、暇寫之
14			鉛永軒主人忍害目疾而寫之
15	文政十一戊子歳三月十三天午間	1828/3/13	鉛永軒主人害眼裡抄寫
16 ★			鉛永軒主人謄之
17			鉛永軒主人謄
18 ☆			鉛永軒主人抄
20			鉛永軒 高階正巽子正 謄
21	文政十一土兄鼠六月二日	1828/6/2	鉛永軒主人謄之：：、寫了臨田樓上
24			鉛永樓主人抖擻精神謄

40	48	47	39 ★	38 ★	37 ☆	36 ★	35 ★	34	33 ★ ☆	32 ★	31 ★	30	29 ★	28	26 ★	25 ★	57	56	55	87	60	74	51
		文政歲巳丑春上元日				文政十一戊子歲十二月九日							昏時分 文政十一土兄鼠歲十一月十二日黃			文政十一戊子稔十一月八日	文政十一戊子歲八月十日			文政十一戊子年七月念八日			
		1829/1/15				1828/12/9							1828/1/12			1828/11/8	1828/8/10			1828/7/28			
江戸青山 鉛永山人譯	金水山人 鉛永高正異譯文	鉛永陳人譯	圭上的子 鉛永陳人譯	荷塘一圭禪閣 ●「門+黎」門人 鉛永陳人譯	江戸青山 鉛永陳人譯	鉛永陳人譯	江戸青山 鉛永陳人譯	鉛永陳人正異譯	荷塘圭上人門葉 鉛永陳人正異譯	鉛永陳人譯	江戸青山 鉛永陳人正異譯	鉛永陳人譯	鉛永陳人正異譯	鉛永陳人正異譯	荷塘一圭門人 鉛永陳人高階正異譯	鉛永陳人正異譯	鉛永道人 高正異譯	鉛永道人 高正異譯	鉛永陳人抄寫	鉛永山人 原田正異寫之	鉛永樓主人寫	鉛永閣主人 膳之	

80	75	78	76	77	69	68	67	73	72	71	70	65	66	64	63	62	61	46	45	44	43	42	41	
	天保二年辛卯年十二月二日	天保二辛卯年十一月十七日	天保二年辛卯年十一月七日	天保辛卯十一月二日	天保二金弟兔稔上無月念六日	天保二年辛卯十月念四日	天保二年辛卯九月二十九日	天保二年辛卯九月十八日	天保二年辛卯九月四日	天保二年辛卯八月三十日	天保二年八月二十日	天保二年辛卯八月四日	九)	天保二年龍飛辛卯六月(初八)初九	天保二年辛卯六月(初七)初八	天保二年辛卯六月四日	文政十二巳丑年八月十一日	文政十二土弟牛歲六月十五日					★	
	1831/12/2	1831/11/17	1831/11/7	1831/11/2	1831/10/26	1831/10/24	1831/9/29	1831/9/18	1831/9/4	1831/8/30	1831/8/20	1831/8/4	1831/6/8-9	1831/6/7-8	1831/6/4	1829/8/11	1829/6/5							
	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞頗羅墮正異譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	鉛汞譯	江戶 鉛汞山人高階正異譯	江戶 鉛汞山人高階正異子止譯	江戶阿遠耶魔 鉛汞山人譯	江戶青山 鉛汞閑人譯	江戶青山閑漢 鉛項呆人譯	東都 阿活牙麻 鉛汞間人譯	青山 鉛汞山人譯	青耶魔 鉛汞山人譯	

84	天保二金弟兔歲十二月中二日	1831/12/22	江戸青山穩田 鉛永主人譯
81	天保三水兄龍兒歲新正月念二日	1832/1/22	江戸頗羅墮鉛永主人
82			江戸青山 頗羅墮鉛永譯
83	天保三水兄龍歲二月十五日	1832/2/15	青山 頗羅墮鉛永主人譯
85	天保三壬辰年二月十七日	1832/2/17	青山 頗羅墮鉛永譯
86	天保三壬辰年二月念三日	1832/2/23	青山 頗羅墮鉛永主人譯
89	天保三壬辰年二月念五日	1832/2/25	青山 頗羅墮鉛項主人譯
90	天保三壬辰年二月念八日	1832/2/28	鉛永主人譯
88	天保三壬辰年三月七日	1832/3/7	江戸青山 鉛永主人譯
93	天保三龍飛壬辰、三月清明佳節	1832/3(清明)	江戸青山 頗羅墮鉛永主人譯
98	天保三壬辰年三月十四日	1832/3/14	江戸青山 鉛永主人譯
91	天保三龍集壬辰孟夏黑頭	1832/4	鉛永主人譯
99	天保三壬辰年四月七日	1832/4/7	鉛永譯
96	天保三壬辰年四月九日	1832/4/9	鉛永譯
97	天保三水兄龍兒稔四月十一日	1832/4/11	鉛永譯
100	天保三壬辰年四月十三日	1832/4/13	鉛永譯
92	天保三水兄龍兒稔孟夏十八日	1832/4/18	鉛永主人譯
94	天保三壬辰年四月念二日	1832/4/22	江戸青山 鉛永山人高階正異譯
95	天保三壬辰年四月念三日	1832/4/23	鉛永譯

79	59	58	54	53	52	49 (前半)	27		23 ☆	22	19	9	8	7
				*早期か?					*早期か?					
原田正巽	江戸青山 鉛汞閑人高階正巽譯	江戸 鉛汞道人譯(後から書き足したか)	江戸 高階正巽止譯	鉛汞陳人譯(後から書き足したか)	鉛汞譯(後から書き足したか)	鉛汞陳人譯	鉛汞陳人譯	幡宮是也 于江戸麻布長坂太田原侯藩城隍唐西久保八	燒鉛煉汞的仮仙人鉛汞軒主人譯 軒主人、姓高階、名正巽、字子正、俗号原田端太夫、又原田書頗羅墮、号鉛汞軒。生于江戸麻布長坂太田原侯藩城隍唐西久保八幡宮是也	鉛汞譯(後から書き足したか)			鉛汞譯(後から書き足したか)	高階正巽子正

【現時点で判断の付かない回】